S・ボスキー著

『開発銀行の業務とその諸問題』

Shirley Boskey. *Problems and Practices of Development Banks.* Published for the International Bank for Reconstruction and Development. Baltimore: Johns Hopkins Press, 1959. xi+201 p.

世界銀行は低開発国の経済発展およびこれらの国に設立された開発銀行，さらに先進国の開発銀行の業務に資するため，実務家の参考となる各種の出版物を刊行している。本書はW. Diamond の *Development Banks* についで，各国の開発銀行について論じた2冊目のものである。本書を同じく世界銀行発行の J. Tinbergen, *The Design of Development* (1958) と比較すれば，前者は開発銀行の目的や機能を解明しようとするやや理論的色彩の濃いのに対し，本書は各国の開発銀行が経験した諸問題とそこで採用された解決方法のなかから一般に共通すると思われる課題を摘出し，それに解答を与えるという方法でかかれたやや実践的色彩の濃いものである。

1958年5月，世界銀行は12カ国の開発銀行担当者と International Finance Corporation の職員を招いて開発銀行が当面する問題を討議する会議を開催した。本書の素材はその多くをこの会議の討論から得たものである。

R・I・オードレイ著

『東アフリカの族長——ウガンダとタンガニカ部族内における政治的発展の研究——』

Richards I. Audrey. *East African Chiefs: A Study of Political Development in Some Uganda and Tanganyika Tribes.* London: Faber and Faber Limited, 1960. 419 p.

この本は Colonial Development and Walfare Act (1940)によりウガンダに設立されたイギリスの東アフリカ研究所 (East African Institute of Social Research) における15人の学者による研究成果をまとめたものである。ウガンダ，タンガニカの14の部族を取り上げ，各部族につきその歴史と伝統的な政治制度について述べ，そこにイギリス流の行政制度の導入によってどのような変化が生じたか考察する。ついで各部族内の族長の考察に及び，1154人にわたる族長の系譜を調査しているが，ここで統計を利用して族長の年令，教育程度，宗教などを浮き彫りしている。さらに各部族の世襲的支配者とヨーロッパ封建社会の支配者との比較検討もなしている。

L・リンケ著

『コントラストの国エクアドル』

Lilo Linke. *Ecuador: Country of Contrasts.* London: Oxford University Press, 1960. x+193 p.

エクアドルは赤道直下，ラテン・アメリカ諸国中最小の共和国である。著者は，過去15年間この国に住み，すみずみまで旅をした。時間的のみならず内容的にも豊かな経歴をもつ著者が，この国のあらゆる問題を概観したのが本書である。本書は探検家のためのものではなく，この国の住民の大多数の日常生活を探るのが目的である。

赤道直下の沿岸地帯でも，海抜何千メートルにも達するシエラ山脈帯でも生存のための闘争は厳しい。科学と教育がその闘争を漸次緩和してはいる。だが住みよい国や進んだ国の状態に追いつくまでには前途ほど遠い。その主たる障害は何なのか——著者は本書の中でこれを探る。そして人的な障害も自然の課するそれもすべては克服不可能なものではない。いまやこの国の秘められた可能性は開発されるのを待っている——と結論する。

S・ラバン著

『共産中国における人間の条件』

Suzanne Labin. *La condition humaine en la Chine communiste.* Paris: La Table Ronde, 1959. 510 p.

「北京から招かれて中共を訪れた人の手になる多くの本がある。だがそれらは隠されたものの表面しか見ていない。恐怖から身を伏せ，口をつぐんでいる人民との接触はみられない。著者の知るかぎりまだ何人も最も豊かで最も蓋然性に富む情報のやま——すなわち避難民の証言 (les temoignages des réfugiés)——を発掘していない。この間の空白を埋めるのが本書の目的である」。1952年以降のみでも400万の避難民が中共からのがれている。これはひとつの階級の避難ではなく，階級を越えた大衆避難であると著者は論じている。著者は2回にわたって香港を訪れ，避難民中54人を選んで直接面接し，なぜかれらが多くの困難と危険をおかしてまで困難な生活の待っている香港へのがれてきたのかをたずねる。ある農民，ある元共産党幹部，ある銀行員，ある学生，商人，主婦，元青年共産党員，労働者，漁夫の場合。いわば避難民の口を通じてまとめられた中共の内幕である。